

## 早鳥／はやとり：教材・教材観の変化・不変化

*Hayatori* : changed and unchanged points in a textbook material and its views

立岡 裕士

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748 鳴門教育大学  
TATUOKA Yuuzi  
Naruto Univ. of Edu.  
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**抄録：**早鳥／はやとりという作品は、戦前・戦後を通じて約40年間、小学校国語教科書に教材として利用された。この作品には国定教科書系と光村出版系との二つの種類があるが、構成には大きな差はない。いずれの作品でも主題となっているのは、子どもと重ね合わされる楠の伸びる力とそれが障害となった時の人々の対応とである。人々の対応をどれほど重視するかは教科書によって同じではないが、この二つの近代的価値がこの教材を長く採用させることになった要素であろう。

**キーワード：**早鳥（はやとり） 国語教材 風土記

**Abstract :** *Hayatori* is a tale adapted as a textbook material of elementary school. It was adopted nearly for 40 years in spite of great social change in Japan. This author enquired the value laden for the tale as the background of the preference for this tale. The growth power of a camphor tree identified as those of children, and the decisiveness of people who were compelled to confront the tree, are the main element for the preference.

**Keywords :** *Hayatori*, textbook material, *Hudoki*

### I はじめに

筆者は児童向けの図書でいわゆる古風土記の記事（説話）がどのように提供されてきたかを調べた（立岡，印刷中a・b）。その結果，それが初めて現れた20C初頭から現在までに（風土記を明示するか否かを問わず）少なくとも197冊の図書（市販書）で提供されていることが明らかになった。しかし風土記の普及という点では，一般の市販書よりも一定の学齢の児童・生徒が強制的に読まされる学校教科書の方が影響力が大きかろう。風土記は記紀・万葉に比べれば文学的評価・知名度は落ちるが，それでも中等学校用の教科書ですでに吉川弘文館の

『高等国文 巻8』（1896）に採られ，1920～40年代には『上代文学選』などの書名の16種の図書で採用されていた。戦後も2006年までに28社の83の高校教科書が風土記説話を収めている（日外アソシエーツ株式会社編（2008）によって検索した）。これに対して小学校の教科書では風土記説話を再話した作品が掲載された（表1）。風土記の記事がどのような題名で再話されるかあらかじめ知りたいため，採用状況を明らかにするためには悉皆調査によらねばならない。このため戦後の検定教科書での採用状況を筆者はまだ明らかにできていない。表1に挙げた説話に関しては，速鳥<sup>1)</sup>は表2のように掲載されているが他の説話は採用されていないようである<sup>2)</sup>（東書文庫の検索システム（<http://www.tosho-bunko.jp/search/>）による）。速鳥は，1950年代前半の中断期間はあるものの，1933年から1976年にいたる約40年間にわたりいずれかの教科書で使われたことがわかる。

学校教育が社会のなかにある以上，その教育内容が社会

表1 風土記再話作品を掲載する国定教科書

期（使用年度）	浦島子	モチノマト	国びき／国引き	早鳥／はやとり
1 期（1904～1909）	高等小学読本巻2			
2 期（1910～1917）		尋常小学読本巻2		
3 期（1918～1932）		尋常小学読本国語巻2		
4 期（1933～1940）			小学国語読本巻3	小学国語読本巻4
5 期（1941～1945）			よみかた巻3 うたのほん下	よみかた巻4
暫定版（1946）				よみかた巻3
6 期（1947～1949）				よみかた巻3

国定教科書は，年次進行で新教科書に移行したので，第5期までは学年によって使用期間が異なる。ここでは速鳥を掲載した第2学年の使用期間を記載する。

表2 速鳥を掲載する戦後検定教科書

使用年度	学習指導要領	出版者	教科書名	作品名
1956～1960	2次	二葉	新編こくごの本2年2	早鳥
1959～1960		二葉	こくご2年上	はやとり
1959～1960		学校図書	わたしたちのこくご2年下	はやとり
1961～1964	3次	光村図書出版	小学新国語3年下	はやとり
1965～1967		光村図書出版	しょうがくしんこくご2年上	はやとり
1965～1967		教育出版	新版標準こくご2年下	はやとり
1968～1970		光村図書出版	しょうがくしんこくご2年上	はやとり
1968～1970		教育出版	新訂標準こくご2年下	はやとり
1971～1973	4次	教育出版	新版標準国語2年下	はやとり
1971～1973		東京書籍	新しい国語2上	はやとり
1974～1976		教育出版	改訂標準国語2年下	はやとり
1974～1976		東京書籍	新訂新しい国語2上	はやとり

の変化から超然たることはできず、教育学の進展によって教育内容が変化するばかりでなく、社会情勢の変化(それは権力者の価値観のみならず、児童・生徒の生活様式の変化などでもありうる)に応じて教育内容は変化してきた。近代日本の教育では教科書が学校教育の中核にあり、したがって教育を取り囲む諸変化は教科書にも反映される。すなわち、時宜に適すると見られた教材が新規に採用される一方で、不適切と見なされた教材が削除されることになる<sup>3)</sup>。これを逆に見れば、同一の教材が長い期間、特に戦前から戦後にまたがって採用されつづけたのであれば、そのような長寿教材は内容ばかりでなく価値観においても社会の変化に影響されにくい、近代社会に通有の価値観を具現したもの(あるいは少なくとも近代社会の価値観と親和的なもの)と言えそうである。しかし実際には、それほど単純なものではない。「浦島太郎」「かぐや姫」「花咲か爺」「海幸山幸」などに関する先行研究(中嶋, 2010a・b; 棚田, 2006; 豊島, 2007)が示すように、そもそも再話の場合、原典が同じことが必ずしも作品の「同一」性を意味しない。そしてそれぞれの再話作品があるいは同じあるいは違う価値を負荷されてきた(たとえば唐沢(1990, pp.85～86)・竹村(2015))。

結論先取的ではあるが、速鳥はほぼ同じ作品が戦前から戦後に使われつづけた。稀な事例ではなかろうか。そうであれば、速鳥について調べることは単に初等教科書における風土記ないしは古代説話の受容という点のみならず、学校教育における近代的な価値観について考える上でも有用な事例となると考える。

## II 速鳥という教材

### 1. 採用状況

すでに触れたように速鳥は1933年使用開始の国定4期教科書で採用され、文章が一部改編されつつも暫定版も含めて第6期まで17年間にわたり使用されつづけた

(表1。学年配当も第2学年のままで変わりはない<sup>4)</sup>)。一方、検定教科書では1956年から1976年まで5社の12教科書で使用された(表2)。学年配当は1例を除いて全て第2学年である。

### 2. 巨樹説話としての速鳥

速鳥の原拠は播磨風土記の明石駅逸文とされている。この説話は巨樹説話の一つである。巨樹説話についてはすでに多くの先行研究がある(青木(1994)など)。ここではそれらを踏まえつつ、本稿の立論の必要により、巨樹説話の構成を以下のように設定する。

- A 巨樹存在譚  
巨樹の存在・形容
- B 巨樹伐採譚  
1 巨樹の害  
2 巨樹伐採の困難(怪異)とその克服
- C 巨樹利用譚  
1 巨樹の利用  
2 利用の終焉

AはB・Cの前提であるが、Aだけの巨樹説話もある(肥前風土記佐賀郡総記)<sup>5)</sup>。B・Cは相互に関係のない独立した説話系統である。実際、風土記掲載の巨樹譚にはBは含まれていない。Bの古い例は『今昔物語集』巻31の37の大柞説話であろう。ただし今昔物語の話にはB1はあるがB2の要素はない。B2は『三国伝記』巻3の24の大栗説話に見られる<sup>6)</sup>。『三国伝記』のその説話はB1・B2をともに含むが、B1とB2とは独立した要素であるから、B1のないB2だけ(単に材木が必要とされて巨樹が伐採されることになり、怪異を呈する)の伝承も見られる<sup>7)</sup>。

### 3. 収録作品間の異同

#### 1) 国定4期

四つの国定教科書では、4期・5期・6期の間でそれぞれ文章が改変された(暫定版は5期に同じ)。その異同を示すために、まず国4(国定4期の略称。以下同じ)掲載の全文を示す(ただし分綴の空白は削除し、くの字点は仮名に換えた。下線・数字は引用者による。これらの点は他の作品の引用においても同じ)。

昔、ある所に一本のくすの木がありました。①どんな力が、この木にあったのでせう、ひるも夜も、ぐんぐんとのびて行きました。②いつの間にか、くすの木は、その高いこずゑに、時々雲がかゝるほどになりました。③大きなしげた枝は、四方に④ひろがって、どこまでつゞいてゐるのか、⑤見きはめもつかないやうになりました。

⑥毎日、日が出て、くすの木の西がはにあるたくさんの⑦村々は、みんな日かげになります。また夕方近くなると、東の方の⑧村々も、すっかり日かげになってしまひます。⑨そこで、⑩村々の人たちがさうだんして、「あのくすの木を切りたふしてしまはう。」といふことになりました。

こんな大きな木のことで、⑪切るのも大へんでした。⑫何十人、何百人のきこりが集まって、⑬毎日毎日大さわぎをして、やっと切りたふしました。⑭今度は、切りたふした木を、どうしたらよいかといふことになりました。すると、⑮あるちゑのあるおぢいさんがいひました。

「⑯この木をくりぬいて、舟を作ったらどうだろう。」

「なるほど、⑰よいかんがへだ。」

とみんながいひました。

そこで、大ぜいの⑱だいくを集めて、舟を作りにかゝりました。さうして、⑲長い間かゝって、とうとう一さうの舟を作り上げました。

いよいよ海にうかべてみますと、今まで見たことも、聞いたこともない、大きな舟でした。⑳さうして、大ぜいのせんだうがのりこんで、「えいや、えいや。」とこぎましたが、驚いたのは、その舟の早いことでした。せんだうたちが、かいをそろへて㉑一かき水をかきますと、舟は㉒七つの大波をのり切って、まるで鳥のとぶやうに早く走るのでした。

見てみた人たちは、

「何といふ早い舟だらう。」

「ふしぎな舟だ。」

といひました。すると、あのちゑのあるおぢいさんが、「いや、ふしぎでも何でもなし。㉓あのぐんぐんとびて行つたくすの木だ。その力がのりうつつのだらう。鳥のやうに早いから、早鳥といふ名をつけよう。」

といひました。

そののち、早鳥は、たくさんの米や麦や豆やくだものをつんで、㉔みやこの方へたびたび通ひました。

日かげになって困ってゐた村々も、㉕それからだんだんゆたかになって行つたといふことです。

## 2) 国定5期

国4から国5にかけては仮名・漢字の使い方が一部変わり、また表現が僅かに変更された箇所は多い。しかし大きく変更されたのは次の箇所である。

・楠の成長：①の部分が「たいへんな勢で、ひるも夜もぐんぐんとびていきました。」だけに簡略化された。

②はより詳しくなった

何年かたつうちに、このくすの木は、今まで見たことも聞いたこともないほど、大きな木になりました。／とうとうそのてっぺんは、空の雲にとどくやうに

なりました。大きな枝は四方にひろがって、どこからどこまでつづいてゐるのか、わからないほどになりました。

・楠の害：⑥の部分について、「たくさんの村々」といった表現を「何十といふ村」としたほかに、次のように村人の会話を加えて具体化した。

「㉖どうも困つたものだ。」／「お米が半分もできない。」／「なんとかならないものかなあ」／あちらの村でもこちらの村でも、かういって、この大木を見あげました。

・伐採の相談：⑧の「さうだん」を村人たちの会話体にくらめるとともに、伐採の発案者を特定した。

あるちゑのあるおぢいさんがいひました。／「しかたがない。この木を切ることにしよう。」／みんなはびっくりして、／「こんな大きな木を、切ってもいいものでせうか。」／といひますと、おぢいさんは、／「㉗でも、この木は切るよりほかにみちがあるまい。」／といひました。

・伐採の困難：⑨を「それはそれは大さわぎでした」に変えた。

・楠の処分：⑭の部分で老人の指示の形に変えた。「くりぬいて、舟を作るがよい。」

・舟をめぐる台詞：㉘の部分で次のように改められた  
あの勢のよいくすの木で、作った舟だ、勢のよいのあたりまへさ。㉙考えてみれば、このすばらしい舟になるために、あの木はぐんぐんのびたのかもしれない。

・時間の推移を示す表現：②の「いつの間にか」を「何年かたつうちに」に、⑩を「長い間かかつて」に、⑰を「何年かたつて」に、それぞれ改めた。

## 3) 国定6期

国6では新仮名づかいが採用されまた漢字使いも国5とは変っている。しかし文章の変更箇所は少ない。主なものは次の点である。

・楠の害：国5の㉘の台詞が「日があたらないでこまつたものだ」と変えられた。

・伐採の相談：国5の老人の台詞㉙が「日のあたるようにするには、切るよりほかに仕方があるまい。」に変更された。

・舟をめぐる台詞：国5における老人の台詞のうち㉚の部分で削られた。

・結語：国4以来の㉗の部分で「海をわたりました。」だけになった。

## 4) 検定教科書

戦後の検定教科書のうち、二葉・学図・東書・教育出版の4社は基本的に国定4期の文章をほぼそのまま採

表3 国定系はやとりの変更箇所

教科書 変更箇所	二葉 56	二葉 59	学校図書 59	教育出版 65	教育出版 68	教育出版 71・74	東京書籍 71・74
③	そのしげったえだは	そのしげったえだは					
④			ひろがり、				
⑤					見えないくらいに	見えないくらいに	見えないくらいに
⑦		むら		むら	むら	むら	
⑩	おおぜい	おおぜい		おおぜい	おおぜい	おおぜい	
⑪				まい日	毎日	毎日	
⑫		そうして、その木を		そうして、その木を	そうして、その木を	こんどは、その木を	
⑬			ひとりの				
⑮			いい			いい	
⑯							人
⑱			ふねには、大ぜいの				おおぜいの
⑲	水をかきますと	水をかきますと		水をかきますと	水をかきますと	水をかきますと	
⑳				大なみを	大なみを	大なみを	大きなみを
㉑後半							その力が、ふねにもこもっているの だろう
㉒			ゆたかになり、何 千人もの人々が、 たのしくらせる ようになった				

変更箇所の番号は、第二章で引用した国定4期の早鳥に付したものに对应する。

用している。二葉・教育出版の場合はそれぞれのなかでも若干の相違があるが、仮名・漢字の使い方を別にすれば、二葉で3～5箇所、学図・東書で5箇所、教育出版で6～8箇所、でおおむね軽微な変更が加えられているにすぎない(表3)。大きな変更箇所は次の2点である：

- ・東書の2教科書では㉑後半を「その力が、ふねにもこもっているのだろう。」と変えた。
- ・学図は㉒を「日かげになってこまっていた村々も、それからは、だんだんゆたかになり、何千人もの人々が、たのしくらせるようになったということです。」と変えた。

これに対して、光村図書版では国定系とは違う速鳥が掲載されている。しかも3年生用の光村61(1961～1964年に使用された『小学新国語3年下』。以下同じ)と2年生用の光村65・光村68とではまた別な作品となっている。したがって、国定の速鳥との表現上の異同を指摘することは意味がないので、内容面で国定の速鳥と対比的に光村のはやとりを紹介する。

まず光村61のはやとりは放送劇の台本である。4場面(おおむね冬・初夏・夏・秋にあたる<sup>8)</sup>)で構成され、1は楠の成長、2はその害に対して伐採を決断すること、3は伐採後の相談、4は船の進水、の場面である。

- ・楠の生長：楠は(突然に生え)急速に成長しているようである。

「このちょうしでのびていったら、半年もしないうちに、村じゅうが、くすのきのかげになって暗くなってしまおうわ。」「そうになったら、たいへんだ。米もやさいも、できはしない。」

- ・楠の害：心配が現実化し、村人たちは「いくら考えても、むだなことだ。もう、この村をにげ出すよりほかはない。」「くすのき、一本のことで。」「くすのき、一本というけれど、村は、昼も夜もわからないようになってしまった。こんなに暗くては、田うえ時だというのに、なえも、そだたないしー。」といった会話を交わす。

- ・伐採の相談：  
「どうだ、このくすのきを切ることにしては。」「切る。この大きなくすのきを。」「みんなで、力を合わせて切ったら、切れないことはあるまい。」

- ・伐採後の村：国定では特に描写のなかった、伐採後の村の様子が描かれている。

「あ、お日様だ。お日様だ。」「まあ、夜が、明けたようだわ。」「さあ、畑の手入れが、できますね。」

- ・楠の処理：一時は困惑するが、「村の男」が船を作ることを提案し、「どうだね。木をたおしたいきおいで、もう一度、力を合わせて、やってみようではないか。」という。

- ・船を巡る会話：主に子どもたちが船の進水を眺めて会話するが、船の速い理由を聞かれた「村の男」(造船の提案者)は「雲までとどくようないきおいでのびていた、あのくすのきで作ったのだからなあ。きっと、その力が、船にこもっているんだよ。」と答える。

- ・結び：  
「大きくて、あんなにはやいんだから、米や麦をつんで、都に行ったらいいでしょうね。」「そうして、帰りには、また、いろいろな品物をつんでね。」「そうになったら、この村も、しあわせになるな。(以下略)」  
光村65・光村68所収のはやとりは他の速鳥と同じく



物語文となったが、内容的には光村 61 と大差がない（光村 65 と光村 68 との間にも僅かな違いが 3 箇所あるが省略する）。全体は 1～3 の三つに分けられている。1 は楠の生長から害の発生、2 は伐採の相談から完了、3 は船の築造から村の繁栄、を描いている。

- ・楠の害：生長した楠のために「村には、日が、ささなくなり」、人々は暗くて道も歩けず田畑の作物が枯れてしまうと心配する。
- ・伐採の相談：  
おひゃくしょうをやめるといふ人もいました。ほかの村へ行こうといふ人もいました。／みんなの話をきいていた、白いひげのおじいさんが、いいました。／「くすのきを切ってしまうのではないか。」／「えっ、あんな大きなくすのきを。」／みんなびっくりしてしまいました。／「みんなで力を合わせて切ったら、切れないことはあるまい。」
- ・伐採とその後の村：光村 61 と同様に（それほど詳しくはないが印象的に）伐採後の様子も書かれている。大きな木ですから、切るのは、たいへんでした。まい日まい日、みんなで、休まずにくすのきを切りました。そうして、とうとう切りたおしてしまいました。／村が、きゆうに明るくなりました。
- ・船をめぐる会話：「雲にかくれるほどのびたくすのきだ。あの力が、ふねに残っているのだ。」
- ・結び：  
村では、米や麦ややさいがたくさんとれるようになりました。／村の人たちは、それを「はやとり」についで、ほうぼうのまちへうりに行きました。／村の人たちのくらしは、だんだんよくなっていきました。
- ・時間の推移：具体的な時間間隔を示す表現はない。楠の生長は「みるみるうちに」「ぐんぐんのびて」「しまいいには」とだけ表現され、楠伐採と造船作業とはともに「まい日まい日」とだけ表現されている。

## 5) 副読本

教科書ではないが、それに準じて利用されたと思われる副読本について触れたい。日本標準から刊行された『はやとり』は少なくとも 1968 年・1973 年の 2 度刊行されている（国会図書館サーチによる）。したがって、1960 年代末から 1970 年代初めに利用されていたと思われる。本文は 1 ページ 225 字詰めで 30 ページあり（ただし挿絵が数ページ分を占める）、教科書の速鳥と比べると著しく長大である。作者の那須田稔は光村（61・65・68）の教科書作者には含まれていないが、本書は発端から結びに至るまで光村のはやとりと同じ発想で書かれている。

- ・楠の生長：「とつぜん一本のくすのきが、によきつとじめんのはたからはえてきました。」「ふしぎなことに、くすのきはみるみるうちにみあげるほど大きくなりま

した。」

- ・楠の害：村は日陰となり、「空には、日がてりかがやいているというのに、村の中はまっくらなやみです。」生活に窮した村人は農業を止め、あるいは村を出ることまで考える。
- ・楠の伐採：「おじいさん」が伐採を呼び掛ける。村人は「くろいかいぶつのように空にそそり立っているくすのき」に怖気づくが、老人の「みんなで力をあわせてやれば、どんなに大きな木でも切れないことはない。くすのきさえ切りたおすことができれば、村はむかしのように明るくなる。さあ、みんな元気を出そう。」という台詞にはげまされて勇気を出す。「光をかえせ、／村に光をかえせ。」と歌いながら斧を振るう。
- ・伐採の困難：楠は異常な成長力・回復力を示す。「すこしでも、手を休めると、すぐに切ったところが、もともとおりになってしまいます。えだを切ると、よきによきとえだがはえてきます。みきにきずをつけると、しろいするがふきだし、すぐにまえのとおりのみきになってしまいます。」そこで村人は「はをくいしばってはたらきつづけました。」
- ・伐採後の村：楠が倒れて村に光が射すと「村の人たちは、なみだをながしてよろこびあいました。／「光だ、光だ。」／わかものや、むすめたちは、空からふりそそぐ光の中を駆けまわりました。」
- ・楠の処理：「おじいさん」が提案し、皆が賛同して船を作ることになる。
- ・船をめぐる会話：「おじいさん」が船の速い理由を説明する。「あの雲にかくれるほどのいきおいで、ぐんぐんのびていったくすのきだ。その力がふねにのこっているのだよ。」
- ・結び：日光が十分に当たるようになり村では農作物がたくさん穫れるようになる。「村の人たちはそれを「はやとり」につみこんで、とおくの町にうりに出かけました。」「はやとり」はどんな荒天にも航海が妨げられず、「村の人たちのくらしは、「はやとり」のおかげで、だんだんゆたかになっていったということです。」
- ・時間の推移：楠は突然生えだし、「みるみるうちに」「ずんずんずんと」伸びていった。そして「そのうち」村全体を覆うに至った。楠の伐採には具体的な時間経過が表現されている（「一年たち、二年がすぎていきました。）。一方、造船は「長いあいだかかって」とだけ記されている。

以上のように、教科書所収の速鳥は国定系と光村系との二つに大別できる。しかし光村の教科書・解説書に国定系への言及がない<sup>9)</sup>とはいえ、光村系のはやとりは、明石駅記事から直接に、もしくはことさらに国定系と違う方向で、作成されたものではない。全体の構成 (A + B1

+ C12) のみならず上引の文章などから窺えるように、国定系の速鳥の改作と見なすべき作品である。その意味では、教科書の速鳥はすべて国4に由来すると言えるであろう。検定教科書(光村を除く)作品は国4の微修正版である。国5はそれらよりもやや距離のある改作で、国6は国5からの改作である。そして光村は、国4～国6のいずれか一つではなく、いわばそれらの全体を原作として改作されたものである。

どの速鳥にも次の2点は共通している(換言すれば、国4で示された方向が一貫して踏襲された):

- ・風土記の原話はA + C12という構成であるのに対して、速鳥は、A + B1 + C12もしくはA + B12 + C12という構成となっている(国4の「切るのも大へんでした」という記述は、巨樹であれば当然で、特段の怪異が生じて伐採作業が妨げられたわけではない。したがってB2として書かれたわけではないと思われるが、後述するようにそれを困難(とその克服)と考える解説者・教科書編者は多い。さらに日本標準の『はやとり』では楠の異常な成長力がすでに怪異と呼びうるものとなっている)。
- ・明石駅記事は当然のことながら特定の地点と結びつけられた伝説であるのに対して、本作品はそうした時空間的な結び付きを一切抹消し昔話化されている。

### III 教材観の変化

本章では各教科書編者自身による作品の性格付けを中心として、それぞれの速鳥に対する教材観を考えたい。

#### 1) 国定4期

佐野保太郎<sup>10)</sup>は「楠が非常に伸びた。丁度児童の伸びる力と同じやうに、すすくと伸びたのであります。其の伸びた楠が伐られて舟になると偉い勢で進んで行き、それから其舟を造つた村が非常な勢で発展して立派な村になつた、と云ふ風に全体が凡て発展的気分に満ち充ちた文になつて居る」(佐野, 1934, p.34)と述べている。また井上紉は本教材の眼目が「古代人の雄大無辺際的な空想と、積極的な発展精神」とにあるとする(国語教育学会, 1938, p.17)。「発展精神」とは「発展的な生活力」であり、巨樹に対しても「禍を深刻に想像すれば、必ずや神秘的宿命観に捕はれる。所でわが太古人は、其の禍を誇大視せずして却て利用厚生を講じようとしてゐる」ということである。ここでは楠は、その成長力をもったまま単純に船に化生していると言えるであろう。日陰の害は克服すべき障害であるが、楠の伐採は難事と見られている様子はない(そもそも伐採はもとより日照難でさえ、障害というよりも楠の転生の契機のごとく軽く扱われているように思われる)。しかし島津久基は教材の眼目として「平和な生活を脅すものに対する一致団結心、

樹木伐採に於ける集団の共同作業」(国語教育学会, 1938, p.18)も挙げている。大恐慌後の、農村疲弊が一段と進行した状況下では、楠の害に着目する解釈が一般的だったかもしれない。芦田(1934, p.44)もこの点に自力更生・農村改良が暗示されているという。

一方、この作品では老人の知恵は廃物利用にしか現れない。それでも岩瀬法雲は「くすの木の伸びる力」「それが舟となつて走る時の力」に対する二つの驚きに加えて、「人間の智慧」に対する驚きを発見させることが重要であるとしている。「此の智慧あつたが為に第一の驚が第二の驚に展開し、自然物が製作品となつて、かつては死に瀕してゐた村々が斯の如く甦ることが出来たのである」(国語教育学会, 1938, p.21)。

この作品の位置づけに関して、井上は読本「巻一巻二の説話が、童話であり、巻三に於て一部伝説神話にも展開してゐるが、巻四に至つて・・・中略・・・すべて伝説に移つた。巻四は正に日本伝説の巻といふべきである」(国語教育学会, 1938, p.16)と述べている。それにもかかわらず、先に指摘したように早鳥は昔話化されている<sup>11)</sup>。これは、巻4までは「伝説に関するものはあるが、歴史に関するものはなく、・・・中略・・・建国神話関係の主たるものは、次の巻五に系統的に集めて入れ、神話から、だんだん歴史の方へと進展して行く仕組みになつて居る」(国語教育学会, 1938, p.9)という段階主義による処理であろう。しかし島津は「原話での特殊な地方的性質を除去して、一般普遍性を付与させて、何れの国郡、何れの地方の児童にも理解と興味を持てるやうに注意」したものだとして解している(国語教育学会, 1938, p.20)。他方飯田(1934, p.92)は「時も所も暗示的でよいので、描写しては児童の自由な空想を抑へてしまふ」という。いずれにしても昔話となることにより、仁徳説話としての性格をもっていた原抛の明石駅記事は、(特定の)天皇との結合を絶たれることになる。昔話化との関連で、早鳥のなかで現実との唯一の接点である「都」についても、島津が「国とか土地とかに拘泥せず、説明するがよいであらう。だから、ここの「みやこ」の説明にしても、「大きな町」、「東京のやうな所」位の観念でよい」(国語教育学会, 1938, p.20)と考えるのはその帰結である。しかし飯田(1934, p.94)は「「みやこ」は都で天皇のいらつしやるところと解したい」と記しており、実際、芦田恵之助は青森県の小学校における授業で、「都と言つたら天子様のいらつしやるところやぞ。天皇陛下のいらつしやるところ」(芦田, 1987, p.292)と説明し、さらに、この楠が生えていたのは明石で、都とは大阪のことであるとまで補足している(p.296)。島津の見解が教科書編纂者の意を汲んだものであったとしても実際の授業はそれを超えていた可能性がある。

井上は、巨船伝説は「海国民たるに相応し」と考え

ていた（国語教育学会，1938，p.17）。そしてこの作品が『読本』巻4の第2課であり，第1課「富士の山」と第3課「海軍のにいさん」とに挟まれていることに関して，「『富士の山』から，聯想は我が国の古代に馳せて，こゝに速鳥の巨木巨船伝説を」教材化し，海運ということで早鳥から「海軍のにいさん」につながると述べている（国語教育学会，1938，pp.16・24）。先に触れた昔話→伝説→神話→歴史という段階論のなかに早鳥が有効に収まっているかという点も，また古代の連想で富士山から早鳥につながるかという点も，筆者には疑問に思われるが，海運から海軍へという連絡は明白であろう<sup>12)</sup>。

## 2) 国定5期

文部省（1941，p.13）は，この教材の眼目が「上代人の雄大無辺際空想と，積極的な発展精神」にあり，「巨木が農民たちに禍をもたらしたのであるが，わが上代人はこの禍にも屈することなく，却つて利用厚生之道を講じてゐる。まさに禍を転じて福となす国民性のあらはれである。」とする。基本的には国4の立場と同一であると言えよう。しかし「時難をよく克服して厚生之道を図つた上代人の積極的な気性を見るべきである」（p.14）という表現も前掲の井上の発言と微妙に違い，楠の成長叙述(①)を簡略化したこととあわせ，そこに重点の移動がうかがえなくもない。また「海国にふさわしい伝説」（同書pp.13～14）と書かれてはいるが，白井ほか（1941，p.10）はさらに踏み込み，挿絵に関して「くり舟の先に日の丸の旗が掲げられてある。海外に発展する日本を暗示したい」とする（国4の挿絵では船には特に幟は立てられていなかった。この変更には，挿絵画家もしくは文部省の意図が含まれていたのか否かは不明である）。また「早鳥がたびたび都へ通つたこと。其のお蔭で日かげで困つてゐた村々が次第に豊かになつて行つたことは此の船を人間のお役に立てやう。<sup>13)</sup>此の舟で御奉公申し上げやうとする民族の精神，自分達のものとのみしておけぬ日本国民の精神と共に，大君の御恵の絶大なことを表はしてゐる」（国民学校実践研究会，1941，p.62）などは，文部省の意図を超えた読み込みであるのか，文部省が暗示したものに沿っただけに過ぎないのか，筆者には判断できないが，早鳥は巨樹伝説よりも巨船伝説として教えられた可能性はあろう（その点は国4の段階でも同じであろうが）。

国5では伐採の発案者をあえて「ちゑのあるおぢいさん」と特定化した。しかしその点に関して特に説明はなく，「大木をみだりに切るべからざることを反面に言つてゐるのであるが，それも事情によることで，いはばこの非常の場合，村々を救ふために，智慧の「おじいさん」は寧ろこの木を切ることが「みち」とであると説いてゐる。徒に宿命感に捉れない我が国民の積極性を見るべきである」（p.16）とのみ書かれている。国4では不特定の国民

であったものを個人に特定化したに過ぎない。すなわちここの老人の知恵は，逆境に対する意思もしくは判断力と解される。なお，宿命観に捉われぬはずのこの老人の台詞に運命論的な表現が付加された（㉔の部分）のは矛盾に思われるが，「どこまでも積極的な解釈を下している」（p.17）というにとどまっている。

## 3) 国定6期

本教科書については文部省国語教育研究会（1949）が解説している。

「雄大無限な空想と，その発展精神」を読み取らせる（p.40）という点は，国4・国5の立場をそのまま踏襲していると言える。国5との変更点について特に説明はない。

大木を伐つてよいのかと躊躇するのは，「大木に神秘的・靈的なものをみようとする伝説の世界での古代人の思想」であり，それに対して伐採を提案する「老人のちえ」は「合理的妥当性を求めて，現実的可能性を追求していく現代人の心」につながる（p.41）という。知恵の意味が国5とは明らかに変えられている。ただし国4当時，すでに「木を伐るについて，ともすると大木などを伐ると崇るなどといふ迷信があるのに平気で伐つて巨大な船にするなど面白い。淡泊で現実的な国民性がわかる」（小林，1934，p.108）という考え方も提出されていた。国5においても老人の知恵をそうしたものとして読んだ人々がいたであろう。

## 4) 検定教科書（光村以外）

検定教科書については，二葉社のものに教師用指導書類を見つけることができなかつた。したがってここでは二葉以外の3社について取り上げる。

### ・学校図書

「この話の，素材としての特徴は，「伸びる力のたくましさ」「協力」「知恵とそれを生かす生活態度」「躍進する明るさ」などである」（学校図書，1959，p.196）。「切り倒しが大事業であったこと，村人たちが協力してよく働いたこと」（p.202）をわからせるよう求めているが，特に困難さについての言及はない。

### ・教育出版

教育出版では四つの教科書ではやとりを採用しているが，指導書は教育71・教育74のものを確認することができた（教育出版，1971，1974）。はやとりに関する部分は記事が同一のため，前者から引用する。

この民話の主題は，一本のくすのきにこもっている神秘的で不思議な力である。そこには，古代の庶民の自然に対する素朴な畏敬と願いがこめられている。…中略…すべてのことに一貫しているのは，くすのきの神秘的で不思議な力の表れであり，その力を中心



にしてすじが展開していくのである。／この神秘的な力が主題であるといっても、ここでは、その力を村人の知恵と力で生活向上のために開発し役立てたという内容である。ここに、この教材が単なる古代信仰や伝承口碑の域を越えている現代的意義がある（教育出版、1971a, p.74）

・東書（p.182）

東京書籍でも2教科書に採用しているが、そのうち東書74の指導書を確認した。

この作品には、「巨大な樹木のもつ神秘的な力」が、その時々の村人たちの反応や対処のしかたを通して描かれていっている。また、その村人たちの反応や対処のしかたの中には、「我々の祖先が自然に対していただいていた畏敬の心」が描き出されているとも言える。／この作品の主題を、「巨大なくすのきから受けていた災害を克服し、繁栄を来すための民衆の知恵と努力」と見る向きもある。確かに、村人が相談して、何十人何百人という人を集めて木を切りたおしたこと、大勢で長い間かかって船を作ったこと、その船が村に豊かさをもたらしたことなどからは、そのように見ることもできよう。しかしながら、・・・中略・・・民衆の知恵や努力をはるかにこえた「自然のふしぎな力」に対する素朴な畏敬の心が見受けられる。したがって、「民衆の知恵や努力」は、あくまでも、こうした「自然のふしぎな力に対する民衆の畏敬の心」を認めた上で、その反応や対処のしかたの一部としてとらえられなければならないだろう（東京書籍株式会社編集部、1974, p.182）。

同じ作品を対象としている以上当然とも言えるが、3社とも、楠の成長力、それがもたらす害に対処する村人の協力、船による繁栄、を主題と見なしている。しかしそれらの比重には微妙な違いがある。学校図書では楠と人間とを対立的に把える観点を示していない点で国4の立場と最も近いと言えよう。教育出版と東書とは両者の対立に着目する点で共通しながら、教育出版は「知恵」を楠の転生においていわば外的な契機と見なすのに対し、東書は「知恵」を「畏敬の心」の一部として理解するよう求めている（もっとも、このことが、小学2年生に対する授業の実際においてどれだけの差を生むかは定かではない）。

なお、速鳥掲載の教科書に関わる学習指導要領は第2次（1951年発表）・第3次（1958年告示）・第4次（1968年告示）である。第3次要領では第2学年の「内容」において「経験を広め心情を豊かにする童話、説話、詩などを読む」と規定し、第4次要領では「内容の取り扱い」に「童話、説話、詩などを読む」としており、両者に大差はない。一方、教材を選択するための観点はどちらの

要領にも10項目の指示がある。そのうちの7項は、全くあるいはほとんど同一である。しかし第3次の「国土や文化などについて理解と愛情を育て、国民的自覚を養うのに役立つこと」という観点は、第4次には「わが国の国土や文化、伝統について理解と愛情を育てるのに役立つもの」と「日本人としての自覚をもって国を愛し、国家、社会の発展に尽くそうとする態度を養うのに役立つもの」とに分割拡張された。ここに検討した指導書は、学校図書は第2次要領の時期、教育出版・東京書籍はともに第4次要領の時期のものである。それぞれはやとりを次のように位置づけている。まず学校図書では、1年～2年で既修の「日本昔話」の系統をうけた童話教材。わが国古来の童話に、いよいよ関心を深めさせ、古典への素直な接触を図ろうとした」という（学校図書、1959, p.196）。教育出版ははやとりを「童話・説話・物語」のなかの「説話」として一つとし（教育出版国語編集部、1971b, pp.11～14）、さらにははやとりについては「昔話に親しみ、自分から進んで読むこと」を目標に挙げている（教育出版国語編集部、1971a, p.73）。一方、東京書籍では「説話 古典」の一つに位置づけている（東京書籍株式会社編集部、1974, p.16）が、単に「ものがたりを読む」というだけで特に昔話・古典への導入という位置づけはなされていない。

## 5) 光村

光村図書出版（1960）では、はやとりは「でんごん遊び」「わすれないように」という2教材とともに「よく聞きとって」という単元（聞くこと・話すことを主目標とする）のなかに置かれている。そのため、はやとり自体については、「いかにも古代の人々の間に起こり、語り伝えられた感じのする伝説」（p.139）というだけでその内容に関する註釈はない。

光村65・68の解説書である光村図書出版（1964）・光村図書出版（1968）にははやとりに関しては同文の解説が載せられている。

村をおおったくすのきは、村人たちには生活をおびやかす存在であった。しかし、自分たちの運命を積極的に切り開いていこうとする村人たちの手で切り倒されてからは、逆に村人たちの繁栄に役立つ。速鳥は、協力と労働のもたらす結果の象徴でもある。／ここに登場する老人は、村人たちの勇気や創意を呼びさました決断力がある知恵者であって、それ以上の存在ではない。その他、おばさん、おじさん、若者は、それぞれ世代・経験に応じた役割を果たし、全体として協力態勢を著している。最後に子どもたちが登場する。これらの人物の配置の中に、過去、現在、未来にわたる村人たち（民衆）の知恵や気質の継承関係を読みとることができる。／巨木に対する人間の恐れと信仰、古代



人の樹木信仰の心情をすなおに読みとらせたい。(光村  
図書出版 (1964, p.187)

かつて矢沢 (1948, p.96) は「児童の心は、打ちたおされた大きな木と、かつての軍国主義との間に何かの対比を求めているのではないだろうか」と指摘した。那須田作品ではあるいはこれが該当するかもしれない。しかし光村系作品では、楠は脅威的な存在であっても抑圧的な存在とはいえないように思われる。国6初め国定系の速鳥を掲載した戦後教科書の解説書も、矢沢のあげる観点を明示していない。

光村64・68では、はやとりは話の筋を読みとらせることを目標とした単元に置かれている。それについての説明には両方で僅かな違いがある。光村 (1964, p.185) では「わたしたちの祖先が、遠い昔から伝承してきた民族感情にふれ、お話に対するいっそうの興味と関心をもたせることを意図して民話をとりあげた」とする。一方、光村 (1968, p.202) では「民話を読むことによって、わたしたちの祖先が遠い昔から伝承してきた素朴な民族感情にふれさせ、古代神話や伝説などに対する興味と関心をもたせようとしている」という。「お話」を「古代神話や伝説」と具体化したことは、第4次学習指導要領 (社会の第6学年内容の取り扱い) において日本神話の教育が指示されたこと (渡瀬, 2011) と関わるのであろうか。

#### IV 結びにかえて

教科書に採用された速鳥は、国定4期に掲載された早鳥に端を発するもので、光村系はやや異質ではあったが、その他はほぼ同じ作品であった。それが敗戦を挟んで40年近く教科書に採用されてきたのは、まず楠＝児童の成長のイメージが好感されたからであろう。楠の驚異が脅威に転ずるか否かは作品によって異なったが、困難に対して果敢に立ち向かい克服する点は同一で、その近代性が本作品の愛好されるべきもう一つの特徴である。それをどれほど重視するかはまた教科書編者によって同じではないが、この近代性を (作品には明示的には現れない) 巨樹崇拜という「古代人」の心性と対にして語る点は共通している。したがって、巨樹を愛惜するという発想は全く見られない。

佐野保太郎らが1925～1928年に編纂・刊行した第3期高等小学読本 (井上, 1984, p.185) の巻4には「大樹」が掲載されている<sup>13)</sup>。これは、「大樹を多く保存する国民のみが千波万波起伏重畳する治乱興亡の外に立つて、久遠の生命を保存する」、「現実問題の根柢には、大地にどつかと根を下し、空にすつくと伸上る大樹の力が無くてはならない」と論じたものである。読本解説書の執筆者たちはこの文章に気づいていたと思われる。実際、す

で佐藤 (1934, p.116) は「大樹」は「考へ方が全然異なつてゐる。参考として読んでみるがよい」と述べている<sup>14)</sup>。こうした観点はのちの教科書作者たちに受け継がれることはなかったのであろう。しかし児童向けの図書では必ずしもそうではない。速鳥が教科書に掲載されているからであろうが、幼少児を対象にした図書・雑誌などで速鳥説話を取り上げたものが戦前からある (立岡, 印刷中 a)<sup>15)</sup>。そのなかでは、まず榎 (1969) が、楠を供出させられた地元の人間および伐られた楠の立場で話を構成している (さらにそれは、ほとんどそのまま与田 (1970) に取り入れられた)。したがって、教科書の外側では1960年代の末にいたって、子どもにもそうした観点が呈示されるようになったと言えよう。

速鳥が教科書から消えていく状況については今後の課題としたい。

付記：本研究にあたっては、教育図書館および鳴門教育大附属図書館所蔵の教科書・教科書解説書を利用した。また、同附属図書館を介して他の図書館の文献を閲覧・複写させていただいた。関係機関にお礼申し上げます。

#### 注

- 1) 本稿で対象とする教材の題名には「早鳥」・「はやとり」という2種類の表記があり、その一方、現在の漢字の用法からすればより適切な「速鳥」を採用した教科書はない。特定教科書に偏らない本教材の包括的な表記として早鳥／はやとりを併記することは煩雑なため、本稿では「速鳥」をその用に充てる。
- 2) ただし「餅の的」は、教科書ではないが、文部省 (1964, pp.28～30) に採用されている (国定教科書掲載の作品そのものではなく西山敏夫によるものである)。
- 3) 敗戦後の処置は言うまでもなく、Daudetの「最後の授業」 (府川, 1992) も著名な事例である。
- 4) ただし学習時期は、4期・5期には後期、暫定版と6期では前期、とされた。同一学年内の学習時期の異同については本稿では問題としない。
- 5) 豊後風土記玖珠郡総記のように巨樹の存在のみを語ってその巨大さについて具体的に語らない記事もある (同風土記直入郡総記も同様であろう)。したがってAを巨樹の存在と巨樹の形容とに分割することができるが、本稿では無用なので省略する。
- 6) 『今昔物語集』は小学館新編日本古典文学全集本による。『三国伝記』は三弥井書店刊本による。
- 7) たとえばおざわ (1995)。
- 8) 作品中に時期は明示されていないが、1ではモズ、2では蛙、3ではセミ、4ではキリギリスが、鳴いている

と設定されている。さらに、それぞれの声が「何をあらわそうとしているのでしょうか」という設問が加えられて児童の注意を求めている。

- 9) 光村 61 のはやとりについて、光村図書出版 (1960) には執筆者に関する記載はない。光村 65・光村 68 のはやとりについては「編集委員書きおろし」(光村図書出版, 1964, p.198)「編集委員が再話」(光村図書出版, 1968, p.214) とのみ記されている(付言すれば、これらの教科書には石森延男以下数名が「著者」として表記されており、それと「編集委員」との関係は厳密には明らかではない)。
- 10) 佐野保太郎・井上紉はともに国 4 の編纂者である(井上, 1984, p.30)。なかでも井上は国 4・国 5 の早鳥の原作者である(井上, 1984, pp.199・201)。ただし井上は 1944 年に辞職した(井上, 1984, p.197)ので国 6 におけるはやとりの改変には(少なくとも形式的には)あずかっていないはずである。
- 11) この点は早鳥のみならず、早鳥と同じく読本巻 4 におさめられた百合若も同様であり、白兎も大国主以外は説話外の空間との接点を欠いている。また大江山・羽衣は舞台となる地名が示されているが、大江山は富士山とは違い、特に説明されない限り児童は実在性を感じることもその所在を問うこともなからう。
- 12) 井上 (1934, p.7) は楠の害の克服に関して、「恰度今日の日本品が世界市場到るところにおいて圧迫されるが、併しそれに対して、それ相当の手段を取つては伸びて行く、それが日本人ではないかと思ふ。さういふところが古代人の面影にありはしないか」と述べている。(海運・貿易の問題ではなく)単なる困難の事例としてでもこうした問題が挙がる点に、井上らの意識がうかがえよう。
- 13) 原文は鶴見祐輔が執筆した「大樹礼賛」で、朝日新聞に執筆者入れ替わりで連載されていた「経済随想」の一つである(1926 年 12 月 14 日掲載)。読本にはその一部を削除して掲載している。
- 14) 小林 (1934, pp.105~106) も、特に速鳥との差異を注意してはいないが、やはり鶴見のこの文章を引用している。さらに佐藤 (1934, p.116) は、『『じやまもの』を切り払つたことになつてゐるが、これは今日の一般的な考へ方からすれば、著しく異なるところである」とも述べている。その「一般的な考へ方」が崇りを恐れる類のものなのか、自然保護的なものなのか、明らかではない(そもそも両者を截然と区別できるわけでもなからう)。しかし「大樹」に言及している以上、後者の要素が皆無だということはないと思われる。「かうした不思議な神秘的な楠の話を古代の日本人が面白い話として語り伝えてゐたといふことは、そこに我が国民の上に巨木を崇拜し、自然を崇拜し、神秘を喜び

また生々発展を希ふ心のあることがわかるのである。／ 取立てゝ国民的教材といふ程のものではないが、これらの神秘を味ふ心持は知らず識らず子供等の頭にも滲みこんで、国民的教養の一資料となるものだと思ふ」(田中, 1934, p.44) という考え方も見られた。

- 15) 立岡 (印刷中 a) に挙げたほかに、雑誌掲載作品では、『小学二年生』13 卷 8 号 (1937)・『小学二年生』16 卷 13 号 (1961)・『キンダーブック 観察絵本 5・6 才用』20 卷 10 号などがある。

## 文献

- 青木周平 (1994) 巨木伝承の展開と定着。青木周平『古事記研究』おうふう, 318~335
- 芦田恵之助 (1934)『小学国語読本と教壇 巻 4』同志同行社
- 芦田恵之助 (1987) 早鳥。芦田恵之助『芦田恵之助国語教育全集第 10 巻 読み方実践編その 4』明治図書出版, 284~298
- おざわとしお (1995) 大木の秘密。おざわとしお『日本の昔話 4 さるかにかっせん』福音館書店, 29~35
- 飯田恒作 (1934) 小学国語読本(尋常科用) 巻 4, 1~4。『教育研究』424, 89~106
- 井上超 (1934) 新読本巻四の編纂精神と其解説。『教育研究』424, 1~23
- 井上超 (1984)『国定教科書編集二十五年』武蔵野書院学校図書 (1959)『わたしたちの こくご 2 年 上・下 教師用指導書』学校図書
- 唐沢富太郎 (1990)『唐沢富太郎著作集 第 7 巻 教科書の歴史—教科書と日本人の形成—(下)』ぎょうせい
- 教育出版国語編集部 (1971a)『改訂標準国語 2 年下 教師用指導書』教育出版
- 教育出版国語編集部 (1971b)『改訂標準国語 2 年上 教師用指導書』教育出版
- 教育出版国語編集部 (1974)『改訂標準国語 2 年下 教師用指導書』教育出版
- 国語教育学会編 (1938)『小学国語読本総合研究巻 4』岩波書店
- 国民学校実践研究会 (1941)『国民学校初二の国語教育書【後期用】』八光社
- 小林佐源治 (1934)『小学国語読本新指導書 尋常科第 2 学年後期用』三省堂
- 佐藤末吉 (1934)『生活学習 小学国語読本の指導 尋常科用 巻 4』明治図書
- 佐野保太郎 (1934) 小学国語読本巻 4 の編纂趣旨。中重信編『小学国語読本巻 4 編纂趣旨と取扱』国民教育新聞社, 3~72
- 白井勇・増田勲・緒方明吉 (1941)『国民科読方指導案(四)

- 初二後期』明治図書
- 竹村佳子 (2015) 「花咲翁」の教材化についての一考察：  
明治から太平洋戦争敗戦まで。『昔話：研究と資料』  
43, 94～108
- 立岡裕士 (印刷中 a) 児童向けに再話された風土記説話  
の目録ならびに索引。『鳴門教育大学研究紀要』32
- 立岡裕士 (印刷中 b) 児童向けに再話された古風土記の  
特徴：子どもはどのような風土記を与えられたか。『教  
育実践学論集』18
- 田中豊太郎 (1934) 『改正小学国語読本の実際的取扱  
巻4』目黒書店
- 棚田真由美 (2006) 小学校における古典教材化の考察－  
「海幸山幸」の場合。『言語表現研究』22, 1～12
- 東京書籍株式会社編集部 (1974) 『新訂 新しい国語 2  
教師用指導書』東京書籍
- 豊島明 (2007) 教科書における昔話と口承文芸の比較研  
究。『伝承文化研究』6, 88～106
- 中嶋真弓 (2010 a) 小学校国語教科書教材「かぐやひめ」  
採録の変遷。『学び舎：教職課程研究』5, 12～26
- 中嶋真弓 (2010 b) 小学校国語教科書教材「浦島太郎」  
採録の変遷。『愛知淑徳大学論集 文学部・文学研究科  
篇』35, 57～78
- 日外アソシエーツ株式会社編 (2008) 『読んでおきたい  
名著案内教科書掲載作品 13000』日外アソシエーツ
- 府川源一郎 (1992) 『消えた「最後の授業」：言葉・国  
家・教育』大修館書店
- 槇皓志 (1969) 『キンダーおはなしえほん 第3集 9  
はやとり』フレーベル館
- 光村図書出版 (1960) 『小学新国語 学習指導書 3年  
用』光村図書出版
- 光村図書出版 (1964) 『小学新国語 学習指導書 2年  
用』光村図書出版
- 光村図書出版 (1968) 『小学新国語 学習指導書 2年  
用』光村図書出版
- 文部省 (1934) 『小学国語読本尋常科用巻4／小学書方  
手本尋常科用第二学年下編纂趣意書』東京書籍
- 文部省 (1941) 『よみかた4 教師用』文部省
- 文部省 (1964) 『小学校道德の指導資料 第1集 第2  
学年』文部省
- 文部省国語教育研究会 (1949) 『小学校国語学習指導の  
手引き－第二学年用－』時事通信社
- 矢沢邦彦 (1948) 『物語の世界』非凡閣
- 与田準一 (1970) 『こどもの古典① わたしの古事記  
おおくにぬしの冒険』童心社
- 渡瀬茂 (2011) 小学校学習指導要領国語科の「伝統的な  
言語文化」と神話の教材化。『近代姫路大学教育学部紀  
要』4, 77～89



